

井上ひさし



手鎖心中

直木賞受賞作

井上ひさし

手鎖心中
江戸の夕立ち

手鎖心中

井上ひさし

著者略歴

昭和9年山形県に生る。上智大学外国語学部フランス語学科卒業後、釜石療養所事務員、浅草フランス座文芸部進行係などを経て文筆業に入る。戯曲、テレビ脚本を数多く発表し、芸術祭脚本奨励賞、岸田戯曲賞、芸術選奨文部大臣新人賞を受賞。昭和47年7月「手鎖心中」で第67回直木賞を受ける。

手鎖心中

昭和四十七年十月十五日 第一刷
昭和四十七年十一月二十日 第二刷

定価 五八〇円

著者 井上 ひさし

発行者 檜 原 雅 春

発行者 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

手鎖心中	5
江戸の夕立ち	91
あとがき	268

井上ひさし作品集

手鎖心中

装帧 安彦勝博

手鎖心中

日本橋

江戸へ来てからひと月たった。

着いたときは残暑のさなか、日なかは熱氣に焦げそうで、夜なかは瓦焔に蒸されそうで、まるで一日中、空風呂にでも入っているような心持、「おどろいたね」を「どろいたね」、「そんなんじゃないや」を「なんじゃねえや」、「このべらぼうめ」を「こんべらばア」、「なむあみだぶつ」を「なんまみだぶ」、「きみようきてれつ」を「みようきてれつ」、「ざまあみろ」を「ざまァ」と、飛んだり跳ねたり摘んだり縮んだりする江戸の言葉もせわしく暑苦しく、やはり江戸へ来るのではなかった、浪華の縦横に掘りめぐらされた水路から吹き上げてくる涼しい

川風になぶられながら、芝居小屋の作者部屋で「若手先生」などと奉られていたほうがよかったかもしれないと、先に立たぬ後悔のほそを後に立てて嚙んでいるうちに、救いの秋風が立ちはじめ、空風呂地獄は昔がたり、日本橋通油町の地本問屋耕書堂蔦屋重三郎の、この西向きの三帖もずいぶん凌ぎやすくなり、それにつれて関東弁にも耳か馴染みだしたから妙だ。

蔦重さんとは同じ屋根の下に寝起きしていながら、なかなか顔を合わせる折りが無い。たとえ顔が合っても向うはいつもせわしそうで、庭や廊下ですれ違いながら「あいかわらずお世話になっておりまして、まことに恐悦至極であります」と頭を下げ、「ときに、お渡ししておきました絵草紙の草稿三編、お読みいただけたでしょうか」と頭をあげると、もうあの人はいなくなってしまうている。

浄瑠璃も筆の苦勞、絵草紙も筆の苦勞、同じ筆の苦勞なら、絵草紙でするほうがよほど性にも合うだろうし、仕甲斐もある。——血汗絞って仕上げた新作を、太夫元から突っ返されて悪い酒に酔ったおれがそう喚いたら、兄弟子の並木千柳が「それなら江戸へでも行くさ。東都第一の版元蔦重とは相識の間柄だから、餞別がわりに書状を書いてやってもいい」と慰めてくれた。

その場かぎりの慰めかと思つたら、翌日、さっそく蔦重あての書状を持って来てくれたから

驚いた。

「この書状一本で蔦重は食う心配や寝る心配はもとより、着る世話から女の世話まで心掛けてくれるはずだ」

胸を叩いて請け合うので、書状という安心の大船に乗る気になったのだが、並木千柳はほんとうに蔦重さんとは相識の間柄だったのか。行き交う度毎にこうもすげなくされると、どうも怪しくなってくる。あるいはまた、お土産がわりに差し出した絵草紙草稿三編がどれもこれも箸にも棒にもかからぬ出来栄えなので呆れ返り、蔦重さんはおれに口をきく気もなくしているのか。そうかもしれない。打ちこんで書いたつもりだが、正面切って「たしかによい作なのか」と聞かれると、「はい」と言い切るだけの自信はないのだ。

日に日に蔦重さんの無口が気にかかりはじめ、とうとうこのあいだの朝、下女のおりんさんに雪花菜汁のおかわりをしてもらいながら、「いつもながら結構な味出したね」とまず世辞を振り撒き、「ところで、蔦重さんは、誰にでも口に錠をおろすお方なのかい。まともに口をきいてもらったのは、後にも先にも此処へ着いたときただ一度だけだが……」何気ない風で訊いてみた。

「そんなことを訊くようじゃ与七さんも居候の尻悶え、腰が浮いて居辛くなったみたいだね」

おりんさんはおれの心中をずばと見通した。

「けれど与七さん、心配はいらないよ。旦那様は誰にだってすげなくさるんだから。天明飢饉きんのときの口べらしで、盛岡領野辺地のへじからここへお世話になって十年あまりになるけど、そのあたしでさえ、十年あまりの間に、旦那様と口をきいたのは、百回もないだろうね」

おれはすこし気が楽になり、居候にはご法度はつとの三杯目のおかわりを出す氣になった。

「薦重さんはひところ、薦唐丸つたからまるという狂名で鳴らした狂歌よみだ。だったら当意即妙が売物の、べらべらと京男めいたお喋りしゃべにちがいないと思つていたのさ。こっちがそつと申せばぎゃつと答えるような……」

「いやだね、与七さんは」

おりんさんは飯杓子じやくしを振った。

「それなら学者はみんな聖人で、侍はみんな強者で、医者はみんな仁術使いで、下女はみんな不器量ふきりょうつてことになってしまうよ、おもしろくもない。色ごのみの学者はざら、弱虫侍もざら、算術上手の医者はさらにざら、下女にだってあたしのような器量よしもいる」

おりんさんは飯杓子をまた振つて大いに売りこむ。その拍子に、飯粒が飯杓子からおれの鼻の先に宿がえした。「あらあら」おりんさんはおれの鼻の先から飯粒をつまみとり、乱杭歯らんぐいばに

なすりつけ「とにかく気にしないで大きな顔をしておいでよ」と飯粒を噛んだ。

もともと無口だった薦重さんが、さらに無口の権化になりかたまったのは、三年前、薦重さんの開板した山東京伝作の菟莚本三部作がお上のお咎めを受けてからだよ、とおりんさんが教えてくれた。おれも大阪で、京伝は手鎖五十日、薦重は財産を半分没収されたと噂に聞いた憶えがある。そのとき以来、薦重さんは絵草紙の類にはあまり身を入れず、もっぱら錦絵に力を注いでいるらしい。

「……となると、とんだ間の抜けたときに絵草紙作者なんぞを志したものだ」

とおれはおどけながら膳の前を立ったが、そのとき、ふと胸が鉛のように重くなるのを感じた。

それから、土蔵の前の板の間に、職人たちと坐りこみ、錦絵に使う奉書紙に、絵具の滲み止めにする礬水を引いた。居候から金でも出るといふことになれば大きな顔をしているのだが、徒飯を喰わせてもらっているのは申し訳がなく、肩身もせまい。それで、おれのほうから申し出て、礬水を引かせてもらっている。三十五、六枚も仕上げたころ、渡り廊下を勢いよく響かせて、薦重さんが来た。

「写楽がまた三枚描いて来た。あいかわらずの早仕事だが、出来栄えは極々上々吉、いま、板

木にしているとこだ。そんなわけで、こっちも忙しくなる。ずいぶんと精を出してたのむ」

薦重さんはそれからおれを見た。

「与七さん、明日、京橋木戸際の京伝店^{ぎだ}で、客引を兼ねた煙曲会^{えんきょくかい}がある。京伝と顔見知りになつておくのも損ではないと思うが、どうしますか」

言うまでもないが、おれは頷いた^{うなず}。

「もうひとつ。与七さんの絵草紙の草稿は拝見しました。……氣に入りません」

いきなり脳味噌^{のうみそ}に焼鑊^{やきこて}をじゅっと当てられたような氣がした。

「泥くさい色事と悪い笑いが多すぎます。とくにいけないのはお上の御政道を茶にしすぎていることだ。ドジや野暮は戯作^{げさく}には禁物、くどくなく執拗^{しつごう}くない垢ぬけ^{あかぬけ}のしたところが戯作の妙だと、わたしは思いますよ。それでも、五年も前なら板にしたかもしれないがね。当節じやア、色と笑いはお咎めのもとだ」

「じゃア、どんなのがご時勢に合いますか？」

「それがわかれば、わたしも錦絵ばかり刷つてはいませんよ。では、明日」

その日一日、おれは、江戸へ来たのはやはり間違いだったかもしれない、とそればかり思いながら、礬水を引いた。

京橋

京伝店は京橋南銀座一丁目に四間の間口を占めていた。正面に帳場がある。帳場の右に、煙草入れ、煙管入れ・鼻紙入れ・楊子入れ・短冊入れなどの袋物を納める四列八段の引出しが並び、その前で店の者が顧客に京伝張りの煙管や袋物を見せている。

帳場の左は煙草葉の刻み場で、煙草切り職人が五、六人、溝板ほどもある大きな煙草切り包丁で、顧客の求めに応じ、煙草葉をあるいは薄く、あるいは厚く切り刻んでいる。刻み場の前には、大きな木箱が十ばかりずらり。木箱の中には丹波産上物刻煙草の「舞」(辛口でうまさうだが、おれのような素寒貧にはなかなかのめ舞、手が出舞というやつ)、上野産並物刻煙草の「たて」(値はまあまあだが、おれにはうまいとは思えない。たて喫む人も好き好きだ)、岩代産下物刻煙草の「松川」(松皮を齧っているような味だが、おれの好みと懷中には合う)、その他「竜王」「もき」などの女物刻煙草が入っている。

「合せ煙草うけたまわります」

という木札が出ているところを見ると、今流行の丁子入りや伽羅入りの刻煙草の調合もやっているのだろう。うちそとに人と活気が溢れ、かなりの大店振りだ。

薦重さんの尻にくっついて店に入って行くと、帳場に、縞に黒襟の乙袴な羽織を肩に引かけた三十三、四の男が、銀雁首に赤羅字のしゃれた煙草を銜え、机上に開いた白扇を睨んでいた。

眉細く目も細く口も細く、顔そのものがまた細面で、女のようなだが、鼻だけがいやに大きく堂々としている。鼻のおかげで鼻持ちならぬ色男面にならずに済んでいる。これが京伝だな、とおれは思った。京伝といえば大きな鼻。子どもだって知っていて、大鼻の子に「やい、京伝鼻の鼻くそ、おまえの鼻くそ、富士の山より大きいぞ」と囃し立てるぐらいだ。

その鼻が薦重さんとおれのほうに向いた。

「これは、薦屋さん……煙曲会のお土産に自画賛扇子を、と思ひまして、追いかけてとちり切っているところで……」

鼻がふたたび下を向き、京伝の筆は白扇の上を駆け廻る。またたく間に、潮を吹く大鯨と鯢が白扇の上に浮び上って来た。